福岡市埋蔵文化財調査報告書第1228集

徳永Ｂ遺跡２

― 第２次調査報告 ―

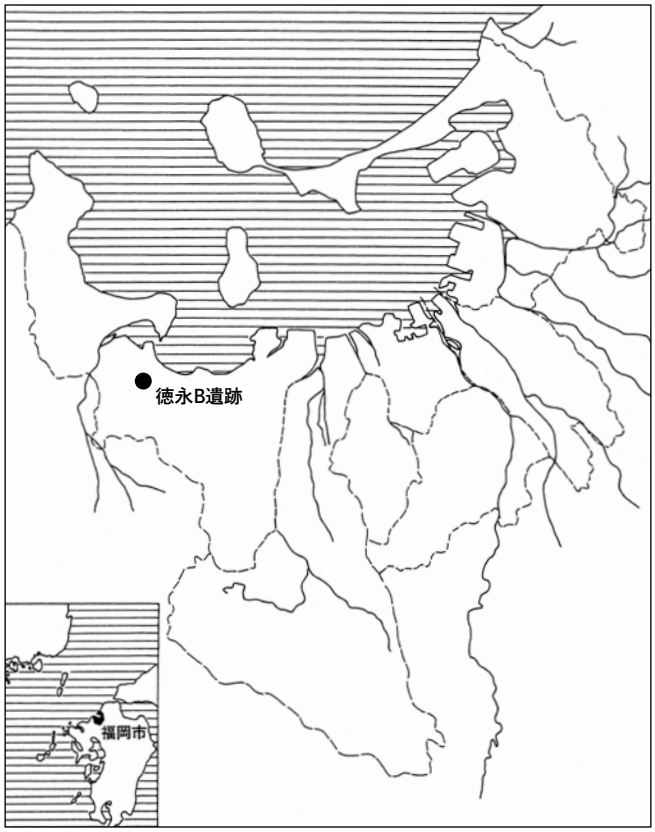
2014

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1228集

徳永Ｂ遺跡２

― 第２次調査報告 ―



遺跡略号　TOB-2
調査番号　0750

2014
福岡市教育委員会

SX27出土　阿高式土器深鉢

序

玄界灘に面する港湾都市福岡は、太古の昔から大陸との交流の窓口として栄え、それを示す多数の埋蔵文化財を残してきました。しかし開発工事の進展に伴って、消滅の危機に瀕しています。福岡市では工事に先立って発掘調査を実施し、後世にその成果と意義を伝えるべく、数十年にわたって努力を重ねて参りました。

本書は福岡市が進める伊都土地区画整理事業に伴って実施した徳永Ｂ遺跡第２次調査の成果を収めたものです。

今回の調査では、縄文時代中期の阿高式土器、古墳時代の竪穴住居跡、古代の焼土坑、古代～中世の掘立柱建物跡が確認され、連綿と続く土地利用の様相が明らかになりました。

本書を通じて調査成果がより多くの方に共有され、活用されることを願ってやみません。

平成26年３月24日

福岡市教育委員会

教育長　酒井　龍彦

例言

1．本書は伊都土地区画整理事業に伴い、福岡市西区徳永において実施した徳永Ｂ遺跡第２次調査の報告である。
2．検出遺構はピットとそれ以外のものとに分け、それぞれ通し番号とし、以下の略号を付した。

ピット	ＳＰ	掘立柱建物	ＳＢ	竪穴住居	ＳＣ
溝	ＳＤ	土　　坑	ＳＫ	性格不明	ＳＸ

3．遺構の実測は木下博文のほか以下の者が行った。
梅野眞澄　辻節子　三谷朗子
4．遺物の実測は木下博文が行った。
5．遺構・遺物の写真撮影は木下博文が行った。
6．本書で使用した方位は座標北で、真北より0°19′西偏する。
7．本書で使用した国土座標は日本測地系第Ⅱ系である。
8．本書に関わる図面・写真・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される。
9．本書の執筆・編集は木下博文が行った。炭化種子について、山崎純男氏に玉稿を賜った。

調査番号　0750	遺跡略号　TOB－2	分布地図番号　120　周船寺　2585
所在地　西区大字徳永198、213　　事前審査番号　13－1－233		
調査面積　682.6㎡　　調査期間　2007.11.15～2008.1.25		

本文目次

第１章　はじめに
１　調査に至る経緯 …… 1
２　調査体制 …… 1
第２章　遺跡の位置と環境
１　地理的環境 …… 1
２　歴史的環境 …… 2
第３章　調査の記録
１　調査の概要 …… 4
２　遺構と遺物 …… 4
竪穴住居
土坑
掘立柱建物
その他
第４章　まとめ …… 14
徳永Ｂ遺跡２次調査出土土器に見られる炭化種子について　山崎純男 …… 15

挿図目次

図１　遺跡の位置（S＝1／25000） …… 2
図２　周辺調査地点位置図（S＝1／4000） …… 3
図３　調査区位置図（S＝1／1000） …… 3
図４　調査区平面図（S＝1／200） …… 5
図５　SC01実測図（S＝1／60、40） …… 6
図６　SC01出土遺物実測図（S＝1／3） …… 7
図７　SC02実測図（S＝1／60） …… 8
図８　SK03・04・05・23実測図（S＝1／30、40） …… 9
図９　SK06・15実測図（S＝1／40） …… 10
図10　SB28実測図（S＝1／60） …… 12
図11　SX27および出土遺物実測図（S＝1／20、3） …… 13
図12　その他の遺構・包含層出土遺物実測図（S＝1／3） …… 14

図版目次

巻頭図版
図版１　調査区西半全景（南から）　調査区東半全景（南東から） …… 17
図版２　竪穴住居SC01（北から）　SC01（西から） …… 18
図版３　SC01南東部土器群出土状況（北東から） …… 19
SC01炉検出状況（南から）　SC01割石検出状況（北から）
図版４　竪穴住居SC02（北西から）　土坑SK03（南から）　土坑SK05（東から） …… 20
図版５　鉄滓廃棄土坑SK04（南から）　SK04完掘状況（南から） …… 21
焼土坑SK06（東から）　SK06完掘状況（東から）
焼土坑SK15（南から）　SK15土層断面（西から）

図版６　土坑SK23（南から）　SK23土器出土状況（西から）……22
掘立柱建物SB29（南から）　掘立柱建物SB14（北から）
掘立柱建物SB16（南から）　掘立柱建物SB22（南から）
図版７　SX27（東から）　SX27（南から）……23
図版８　出土遺物１……24
図版９　出土遺物２……25
図版10　出土遺物３……26
図版11　出土遺物４……27
図版12　出土遺物５……28

第１章　はじめに

１　調査に至る経過

福岡市住宅都市局（前都市整備局）は福岡市西区今宿・女原・徳永一帯で伊都土地区画整理事業を実施している。施行面積約130ｈａに及ぶ。平成８（1996）年11月、都市整備局伊都区画整理事務所より埋蔵文化財課に区画整理事業地内における埋蔵文化財の事前審査について依頼がなされ、同年12月～翌年２月に試掘調査を実施、遺跡の範囲を確認した。その内容に基づき福岡市教育委員会は平成14（2002）年から発掘調査を行っている。

徳永Ｂ遺跡第２次調査は平成19（2007）年11月15日にバックホウによる表土剥ぎより着手した。11月19日より人力による掘り下げを開始、順次遺構の検出・精査・実測を進め、平成20（2008）年１月25日に終了した。

２　調査体制（当時）

事業主体　福岡市都市整備局
調査主体　福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第２課
調査総括　埋蔵文化財第２課長　力武卓治
　　調査第２係長　　常松幹雄
事前審査　埋蔵文化財第１課事前審査係　星野惠美
調査庶務　文化財管理課　　井上幸江
調査担当　調査第２係　　木下博文

整理・報告時（平成25年度）
総括　経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課長　宮井善朗
　　調査第２係長　　榎本義嗣
庶務　埋蔵文化財審査課管理係　　川村啓子
整理・報告　埋蔵文化財センター　木下博文

第２章　遺跡の立地と環境

１　地理的環境

福岡市西部にそびえる高祖山からは、北側の博多湾に向かって細長い丘陵がいくつも派生しており、その上に遺跡が展開している。徳永Ｂ遺跡はその内の一つである。

遺跡の北方には今宿平野と呼ばれる小平野が広がり、東を長垂山系にさえぎられている。早良平野に向かうには海岸の隘路を進まねばならず、現在でもＪＲ筑肥線、国道202号、今宿バイパスなど交通路が集中しており、福岡地域と糸島地域とをつなぐ交通の要所となっている。

古くには海が深く湾入しており（古今津湾）、その湾口に突き出すように伸びる砂洲の先端に玄武岩の産出地である今山があり、大塚遺跡のある丘陵からは間近に見える。

２　歴史的環境

弥生時代には、今山遺跡で玄武岩製磨製石斧が前期末より製作され、九州各地に流通した。今宿五郎江遺跡では、11・12次調査で集落の西、９・10次調査で東を限る南北方向の大溝が検出されている。

大溝からは弥生時代中期後半～後期・終末の大量の土器とともに、農工具・机・短甲・飾板などの木器、黒漆地に朱漆の細線と三角・格子目の文様を施した円筒形漆器、錘・穂摘具などの石器、小銅鐸・鏃・小型仿製鏡・中国製内行花文鏡片・貨泉などの銅製品といった多種多様な遺物が出土している。大量の土器の中には、朝鮮半島の楽浪系土器や日本列島内の各地域から搬入された土器も含まれており、地域間交流の一大拠点としての性格が浮き彫りになった。

大塚遺跡では、今宿五郎江集落の西側の谷に位置する９次調査地点で集落の存続時に投棄されたと見られる弥生時代後期～終末の大量の土器が出土しており、その中には脚台付片口鉢といった珍しい器形も含まれている。

古墳時代には、東の今宿青木から西の飯氏にかけて丘陵上に首長墓が全期間を通じて築造される。その内の１つ大塚遺跡の中心である大塚古墳は後期の前方後円墳である。鋤崎・丸隈山・若八幡宮・山ノ鼻１号・飯氏二塚・兜塚の諸古墳とともに今宿古墳群として、国史跡に一括指定された。その他多数の群集墳が分布しており、一大埋葬地となる。

1　大塚遺跡	2　今宿五郎江遺跡	3　谷遺跡	4　青木遺跡	5　今山遺跡	6　今宿遺跡
7　女原笠掛遺跡	8　女原遺跡	9　徳永Ｂ遺跡	10　徳永Ａ遺跡	11　丸隈山遺跡	12　蓮町遺跡
A　鋤崎古墳	B　大塚古墳	C　山ノ鼻１号墳	D　山ノ鼻２号墳	E　若八幡宮古墳	F　丸隈山古墳

図１　遺跡の位置（S＝1／25000）

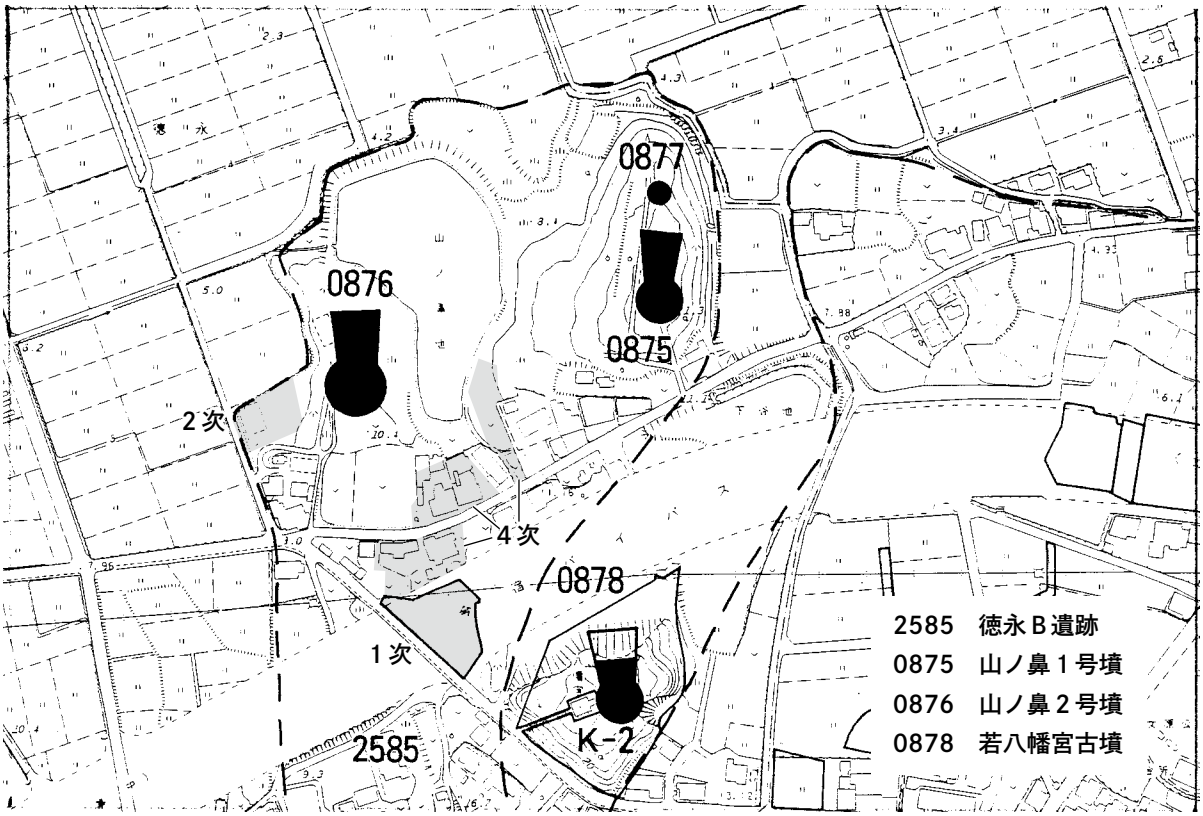


図２　周辺調査地点位置図（S＝1／4000）

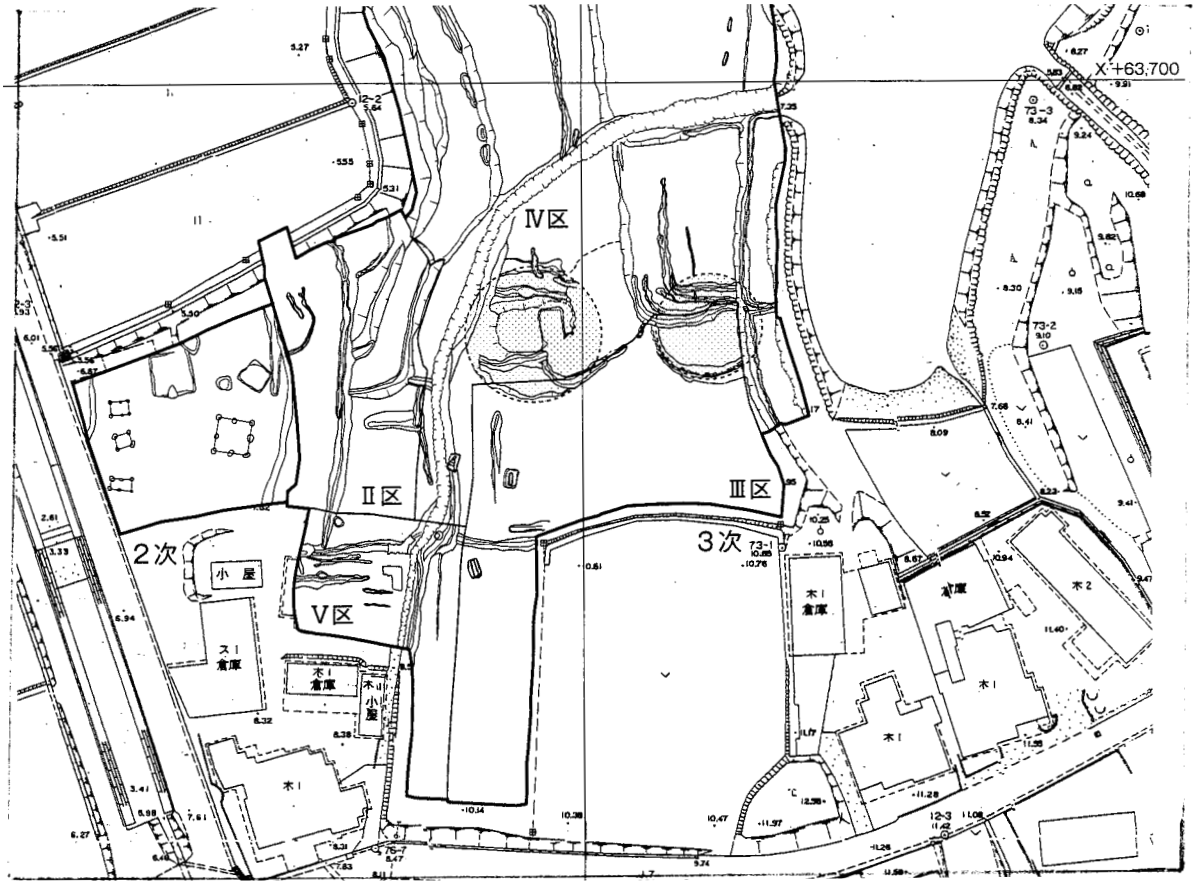


図３　調査地点位置図（S＝1／1000）

第３章　調査の記録

１　調査の概要

本調査区はＪＲ筑肥線九大学研都市駅の南、今宿バイパスの北に位置し、山ノ鼻２号墳の西側に隣接する。東に池を挟んで山ノ鼻１号墳、東南に今宿バイパスを挟んで若八幡宮古墳が所在する。調査面積は682.6㎡である。

以前は宅地･畑･雑種地であったが、調査直前には更地となっている。現地表面の標高は西端で約6.8ｍ、東端で約7.8ｍである。

地山までの基本層序は①表土（現地表面～－30cm)、②オリーブ灰色土（－30cm ～－85cm)、③暗茶褐色土（－85cm ～地山）となっており、③は古代後期～中世の遺物を少量含み、一部に地山直上付近で縄文時代中期の阿高式土器片が出土している。検出遺構の時期変遷から、古墳時代以降に縄文時代中期の遺構が撹乱を受け、混入したものであろう。地山は、調査区南東隅が橙色粘土である以外は黄褐色粘質土で、北西隅にいくにつれ黄色味・砂質が強くなる。

地形は南東隅が最も高く、西端に向かって下がる。北西隅に丘陵の落ちがあり、灰白色細砂による河川堆積となっている。

遺構は地山面で検出した。縄文時代中期の土器一括廃棄１、古墳時代中期前半の竪穴住居１棟、古代の焼土坑２基・鉄滓廃棄土坑１基・掘立柱建物１棟・竪穴住居１棟、平安時代の土坑２基、中世の掘立柱建物12棟のほか、溝・土坑・330におよぶピットを検出した。

２　遺構と遺物

竪穴住居

SC01（図５、図版２・３）

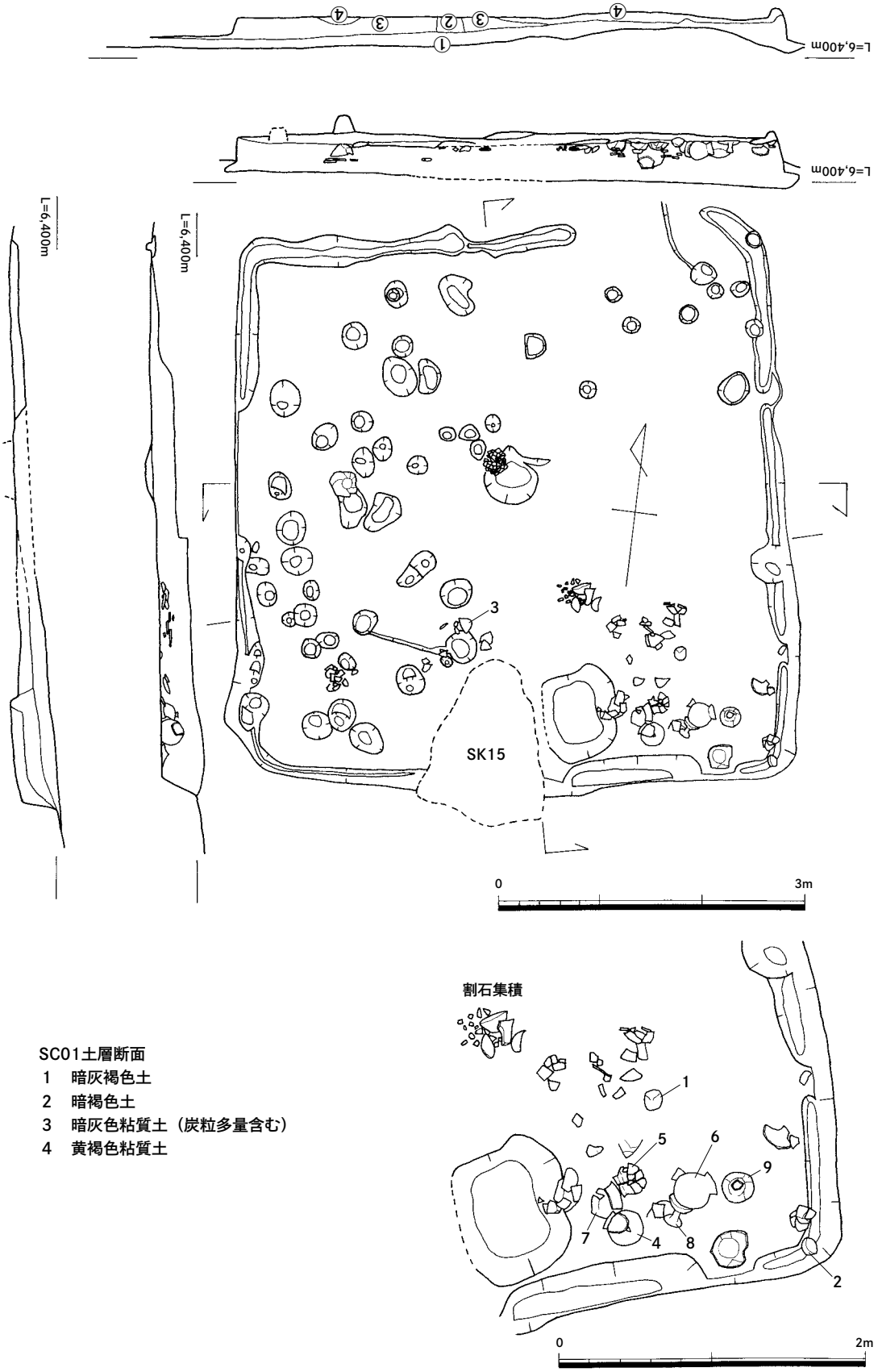
１辺5.5ｍの方形で壁溝がめぐる。北辺は残存状況が悪く壁の立ち上がりが検出できず、壁溝により確定した。貼り床はない。ピットは小さく、配置が不規則である。中央に炭溜りがあり、その傍らで押しつぶれた状態で土器片が出土した。位置から炉と見られるが、焼け締まった痕跡はなかった。遺物は完形に近い壺・高杯・鉢が南東部にのみまとまって床面直上で出土した。その土器群の傍らで割石の集積と見られる箇所が検出された。覆土は２層に分かれ、下層が堆積しいくらか埋没したところで住居の南端中央に焼土坑１基（SK15）が掘り込まれている。その上部が少し削られた後上層が堆積し､ピット（SP298）が掘り込まれている。上層には土師器椀が含まれており平安期の堆積と見られる。また縄文中期の阿高式土器片も含まれており、縄文期の遺構が削平され混入したものであろう。

古墳時代中期前半に位置づけられる。

出土遺物（図６、図版８～９）

１～９は土師器で、１～３が鉢、４～７が壺、８・９が高坏である。１・３は体部外面が淡赤褐色、口縁部が黒色、内面が暗褐色、２は体部外面が褐色または黒灰色、内面が灰褐色を呈し、全てなで調整である。４は体部外面が浅黄橙色、内面の底部と頸部直下が黒褐色、その他が褐色を呈す。調整は体部外面が縦・横方向のハケ目の後胴部下半のみなで消し、頸部直下に爪形圧痕があり、口頸部は横なで、体部内面がヘラ削りである。５は褐色を呈し、調整は体部外面がハケ目、その他はなでである。６は体部内外面ともに褐色を呈し、調整は体部外面がハケ目の後なで消し、口頸部および内面はなでである。７は体部外面が淡橙色、内面が浅黄橙色を呈し、調整は体部外面がハケ目、口頸部は横なで、体部内面がヘラ削りである。８・９は体部内外面ともに橙色を呈する。破片の分離状況から、杯部上半・杯底部・脚部・裾部の四つに分け、それぞれを接合して成形している。しかし杯底部と脚部との接合方法が異なる。８は杯底部に突起がなく、組み合わせ脚部付け足しまたは杯部上乗せ技法、９は杯底部の中央に断面半円形の突出があり、組み合わせ杯部上乗せ充填技法とみられる。それに対応して調整もなでを主体としながら、８が脚部外面ヘラミガキ、９が杯部内面にハケ目を残しており異なっている。

図４　調査区平面図（S＝1／200）



SC01土層断面
1　暗灰褐色土
2　暗褐色土
3　暗灰色粘質土（炭粒多量含む）
4　黄褐色粘質土

図５　SC01実測図（S＝1／60、40）

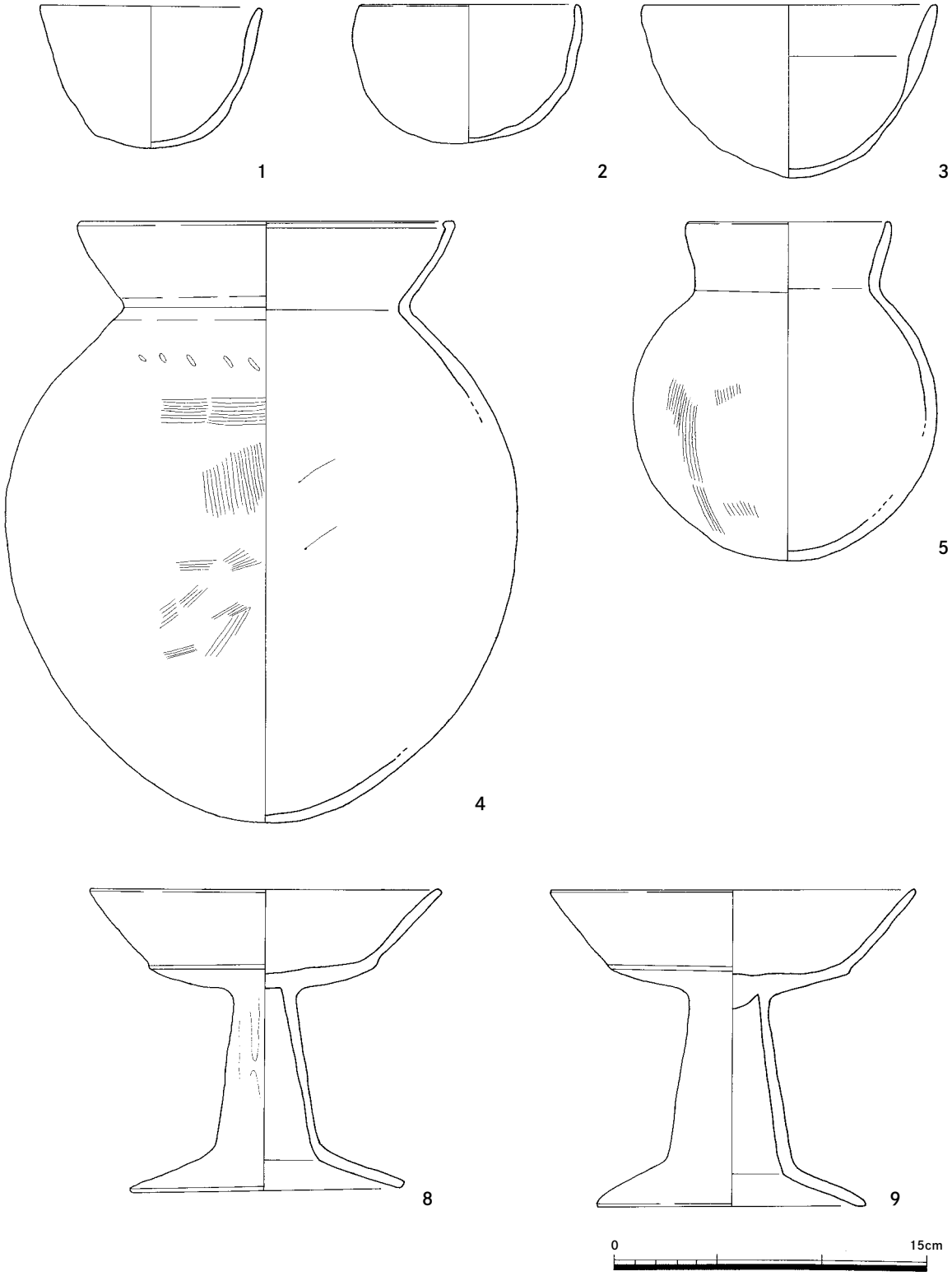


図６　SC01出土遺物実測図（S＝1／3）

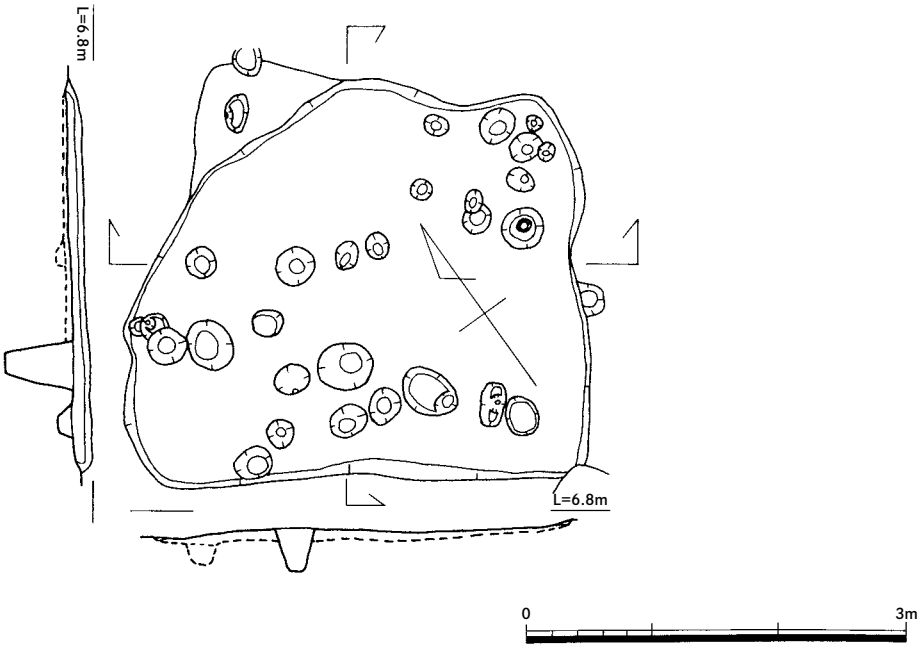


図７　SC02実測図（S＝1／60）

SC02（図７、図版４）
東西3.65ｍ、南北3.12ｍの隅丸方形で、残存の深さは最浅で４cmしかない。貼床がみられる。

土坑
SK03（図８、図版４）
1.8×1.1ｍの不整形で、深さ0.1ｍを測る。SB28のピット（SP204）を切る。以下の出土遺物により、平安時代後期に位置づけられる。
　出土遺物（図版９）
　10 ～ 12は土師器で、10が杯、11・12は皿である。いずれも浅黄橙色を呈す。13は８の字形滑石製品で口径1.75cmの杯部を２個連接しており、器高2.0cmである。博多遺跡群、箱崎遺跡の中世遺構からよく出土する。他に黒色土器Ｂ類椀片が出土している。
SK04（図８、図版５）
　短軸0.6ｍ、長軸0.9ｍの楕円形で深さ0.1ｍを測る。出土遺物は鉄滓のみが全面に詰まっていた。SK06・15との関連が考えられ、それらと同時期であろう。
SK05（図８、図版４）
　0.9×0.8ｍの略円形で、深さ5.0cmを測る。土師器杯集中廃棄坑であり、平安時代前期に位置づけられる。
　出土遺物（図版９）
　14は土師器高台杯である。色調は浅黄橙色を呈し、なで調整である。
SK06（図９、図版５）
　1.6×2.0ｍの丸みを帯びた三角形で、深さ0.5ｍを測る。周囲の壁が赤く焼け、極めて硬くなっている。床上の所で赤い焼土塊が一面に見られ、その下に炭が堆積していた。SK15と同時期のものと見られる。

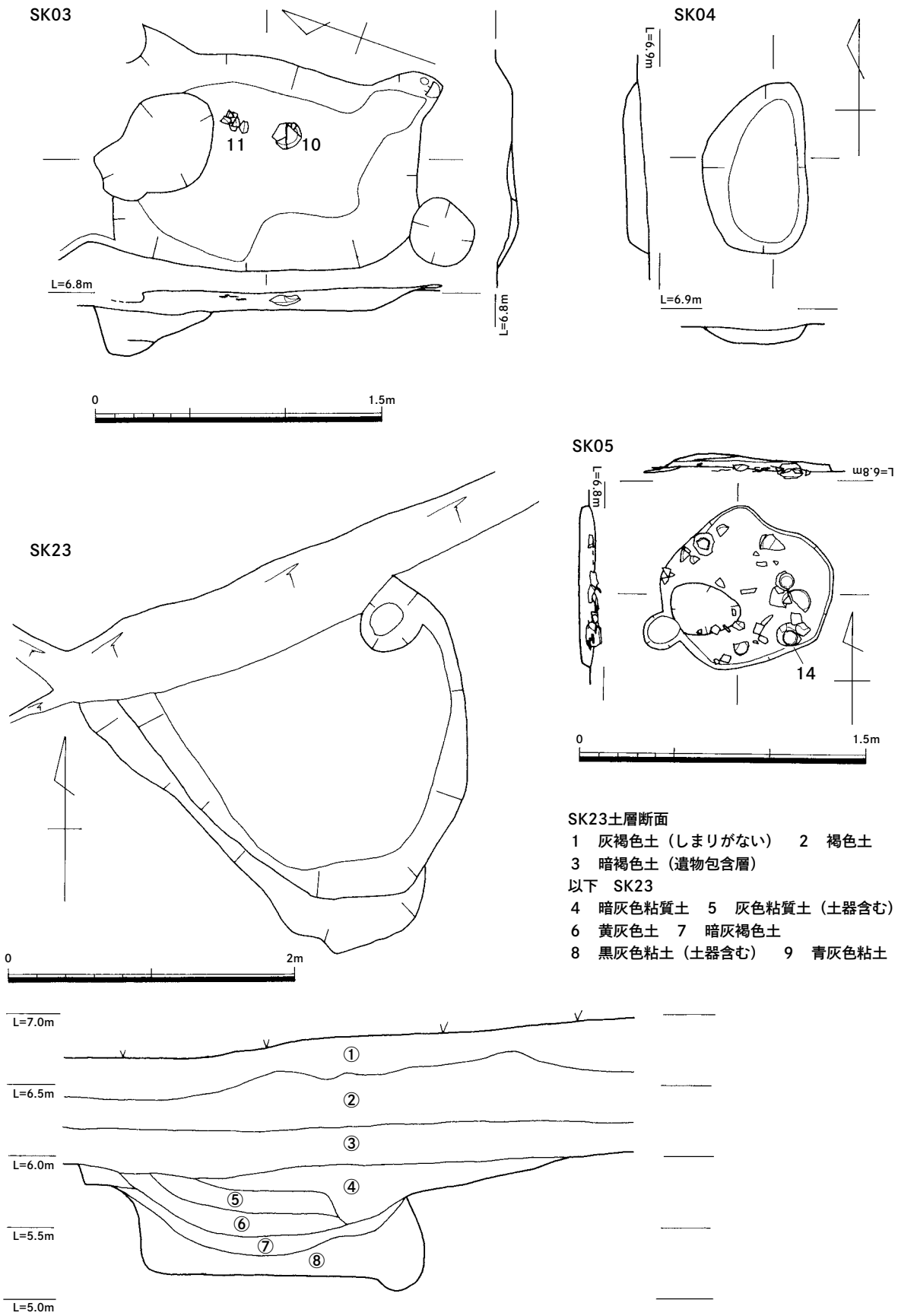


図８　SK03・04・05・23実測図（S＝1／30、40）

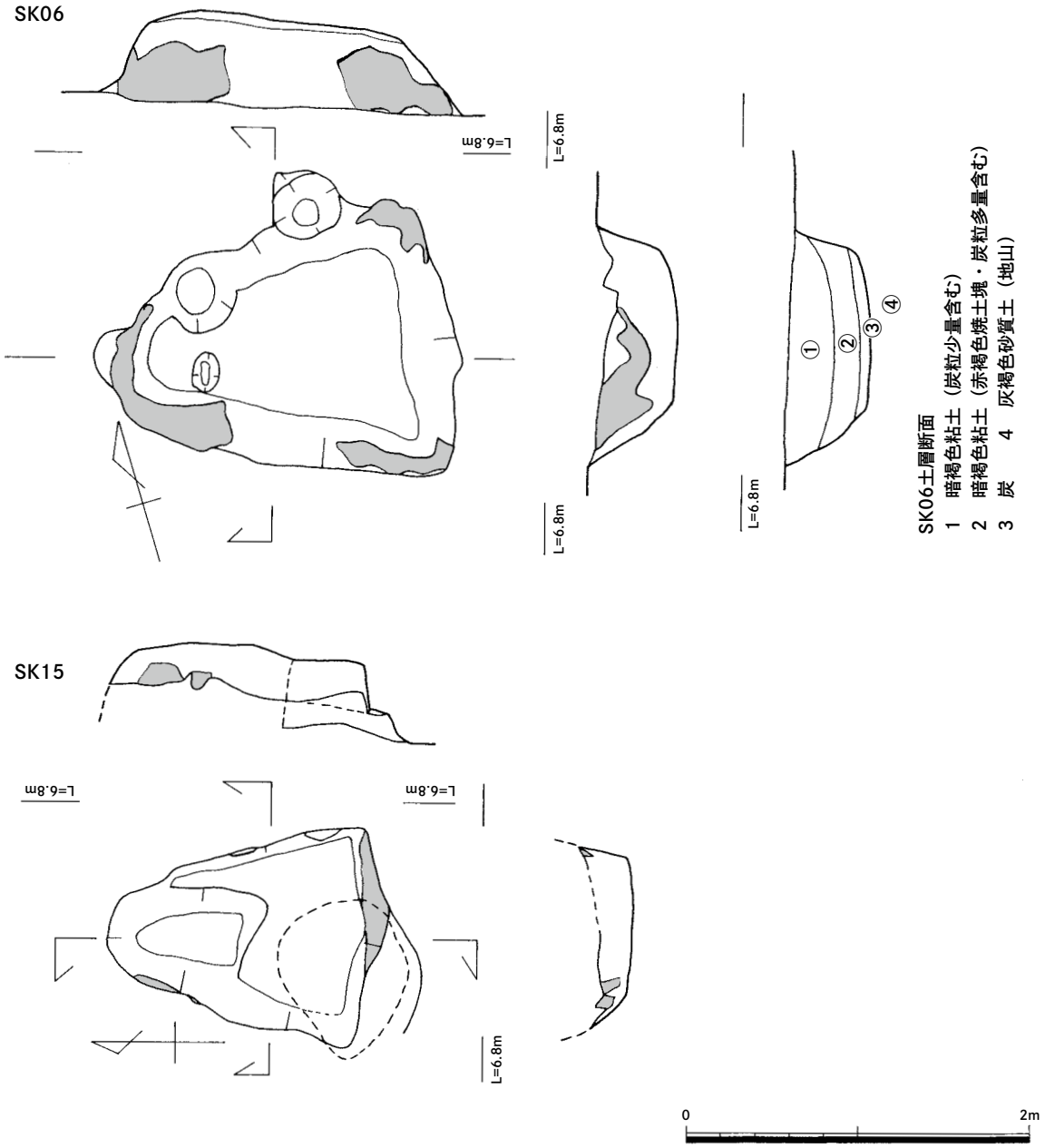


図９　SK06・15実測図（S＝1／40）

SK15（図９、図版５）

1.3×1.6ｍの丸みを帯びた三角形で、深さ0.5ｍを測る。SK06と同様周囲の壁が赤く焼けている。

SK23（図８、図版６）

調査区北端で検出し、北半は調査区外に広がる。長軸2.1ｍ以上、短軸2.35ｍの楕円形で深さ0.6ｍを測る。

出土遺物（図版９）

15は土師器壺である。器高25.0cm、色調は体部内外面ともに褐色を呈し、胴部上半に黒斑がある。調整は体部外面がハケ目、その他はなで、胎土は１～３mm大の白色砂粒を多量含む。

掘立柱建物

計13棟を検出した。その内ＳＢ28が他の遺構との切り合いから古代で最も古く、その他は中世であろう。

SB14（図４、図版６）

SP90・79などからなる梁行１間×桁行２間の東西棟である。柱間は梁行1.8ｍ、桁行は東側が0.9ｍ、西側が1.5ｍである。深さ20cmである。

SB16（図４、図版６）

SP97･30･84･25からなる梁行１間×桁行１間の東西棟である。柱間は梁行1.6ｍ、桁行は1.95 ～ 2.05ｍである。深さ14 ～ 64cmである。

SB22（図４、図版６）

SP113・114・116などからなる梁行１間× ２間の東西棟である。柱間は梁行1.7ｍ、桁行が1.1ｍ、1.7ｍである。深さは５～ 60cmである。

SB28（図10）

２間四方である。柱間は2.2ｍで正方形を呈する。深さは0.3 ～ 0.68ｍである。北辺中央のピット（SP204）がSK03に切られていることから古代前期に位置づけられる。

SB29（図４、図版６）

SP18･14･100･08･25などからなる梁行１間×桁行２間の東西棟である。柱間は梁行･桁行ともに1.4ｍである。深さ25 ～ 70cmである。

SB30（図４）

SP33・87・229などからなる１間四方の南北棟である。柱間は梁行1.6ｍ、桁行1.75ｍである。深さ16 ～ 55cmである。

SB31（図４）

SP98などからなる１間四方の東西棟である。柱間は梁行1.3ｍ、桁行1.9ｍである。深さ19 ～ 90cmである。

SB32（図４）

SP95・107などからなる１間四方の南北棟である。柱間は梁行1.4ｍ、桁行1.9ｍである。深さ18 ～ 50cmである。

SB33（図４）

SP78・89・105などからなる１間四方の南北棟である。柱間は梁行1.1ｍ、桁行1.4ｍである。深さ37 ～ 43cmである。

SB34（図４）

SP71・72などからなる１間四方の東西棟である。柱間は梁行1.5ｍ、桁行1.6ｍである。深さ18 ～ 80cmである。

SB35（図４）

SP26・27などからなる１間四方の東西棟である。柱間は梁行1.1ｍ、桁行1.2ｍである。深さ22 ～ 41cmである。

SB36（図４）

SP22・101などからなる１間四方の南北棟である。柱間は梁行1.25ｍ、桁行1.45ｍである。深さ27 ～ 33cmである

SB37（図）

SP74・103などからなる１間四方の南北棟である。柱間は梁行1.3ｍ、桁行1.8ｍである。深さ13 ～ 44cmである。

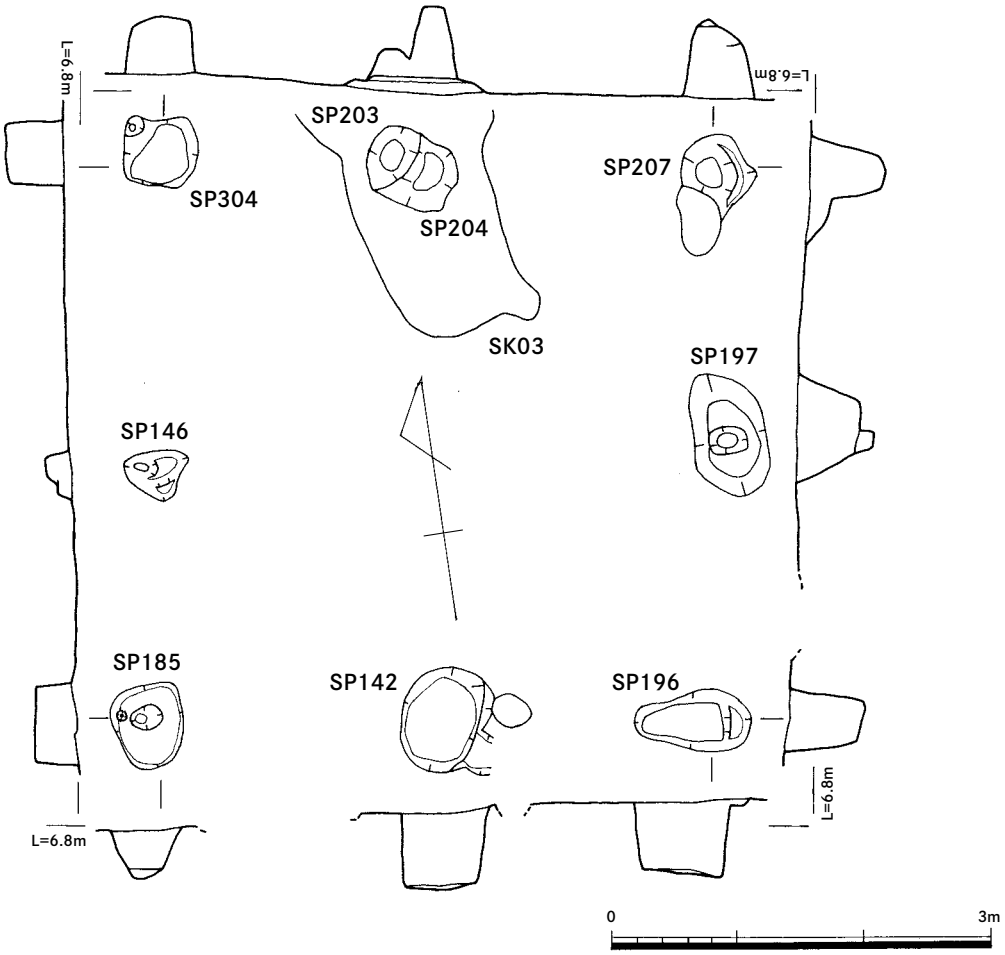


図10　SB28実測図（S＝1／60）

性格不明

SX27（図11、図版７）

縄文中期の土器一括廃棄である。調査区北西部の丘陵肩よりやや下がった位置で検出した。埋土は地山の土によく似ているがやや灰色味が強く、炭粒を含む灰黄褐色粘質土である。輪郭は丸く見えたが不明瞭で、浅かった。従って丘陵の肩際に辛うじて残った貯蔵穴のような遺構の一部か包含層か断定できず、報告に当たってSXとした。

出土遺物（図11、巻頭図版、図版９～11）

縄文土器（16～25）

16・17は中期の阿高式土器で深鉢である。完全には接合しないが、同一個体とみられる。かなり赤味の強い赤褐色を呈し、滑石粒・褐色粒の含有量が多い。16の内面は柾目板調整を施している。

22は無文の粗製土器である。黄褐色を呈し、内外面なで調整である。その他は阿高式土器の破片で18・24が黄褐色、19・20・21・23・25は褐色・赤褐色を呈し、太型凹線文や凹点文を施す。特に23は波状の口縁部が残っており、凹線で蕨手状の文様を施している。

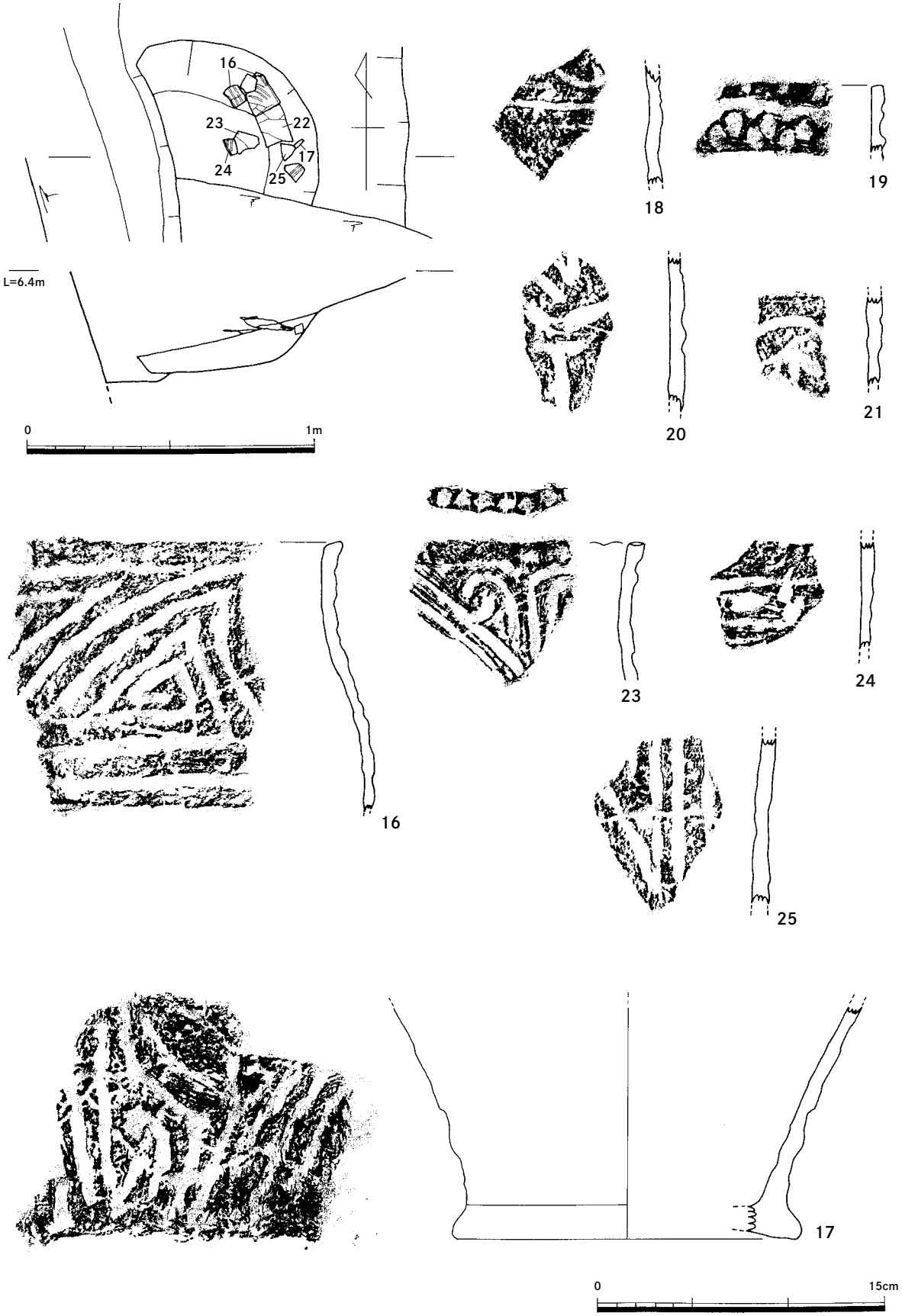


図11　SX27および出土遺物実測図（S＝1／20、3）

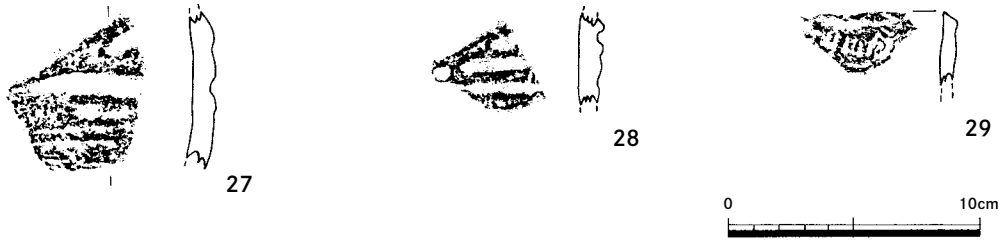


図12　その他の遺構・包含層出土遺物実測図（S＝1／3）

その他の遺構・包含層出土遺物（図12、図版11・12）

26 ～ 30は縄文土器片である。26 ～ 28は阿高式土器で、26は深鉢の底部と見られる。SC01の覆土上層出土。29は並木式土器で、色調は灰色であるが混入された滑石の細粒により銀色を帯びる。SP174出土。30は炭化種子を含有する土器片である。山崎純男氏による別稿を参照されたい。

31は瓦質土器鉢でSK20出土。32は滑石製錘、長5.75cm、最大幅4.1cm、厚さ1.6cmでSP82出土。33は滑石製鍋でSP151出土。34は青磁椀でSP83出土。35は黒曜石製鏃、残存長2.3cm、幅1.2cm、厚さ４mmでSP298出土。36は石鏃、残存長2.75cm、幅1.6cm、厚さ４mmで試掘トレンチ内清掃時の出土。

第４章　まとめ

今回の調査では縄文時代中期、古墳時代中期前半、古代、中世の各時代の遺構を検出した。以下は時代ごとに周辺の調査状況を踏まえて概観しておく。

縄文時代中期の性格不明遺構は西側にある谷への落ち際で検出した。阿高式土器の深鉢片と粗製の無文土器片が共伴している。縄文土器片は調査区北半を中心に後世の遺構埋土からも出土しており、攪乱を受けている。高祖山の麓では、大塚遺跡11次調査でも阿高式土器片が１点、その他石斧・石鏃が出土しており、狩場であったらしい。集落遺構の発見が今後注目される。

古墳時代中期前半では竪穴住居跡・土坑を検出した。調査地の東側段丘はこれまで前方後円墳の山ノ鼻２号墳に比定されてきたが、同地点で実施された３次調査ではその痕跡･関係遺物が見られなかった。代わって円墳・木棺墓・土坑墓・石蓋墓からなる古墳中期の墓群が検出された。それらは今回検出した集落遺構と関連するものと見られ、やや高い段丘上に墓域、その西側のやや低い位置に集落域という構造がうかがえ、貴重な成果をもたらした。

古代には３次調査ともども焼土坑を中心とする生産遺構が中心となる。鉄滓廃棄土坑の存在から製鉄もしくは鍛冶関係の遺構の存在が付近に想定できる。土師器杯の廃棄遺構から平安時代前期頃が一端として捉えられる。

調査区で最も多数検出されたピット群は、微量ではあるが青磁椀や滑石製錘の存在から中世と見られ、掘立柱建物が集中していた様子がうかがえる。

以上のように時代が縄文から中世まで幅広く土地利用がなされ、集落の変遷を跡づけられる成果をもたらすことができた。

徳永Ｂ遺跡２次調査出土土器に見られる炭化種子について

山崎純男

調査担当者の木下博文氏が土器洗浄中に破片の内側中央部にマメ状の炭化物が顔を出しているのに気づき、筆者にその検討を依頼されたものである。以下、その検討結果を報告する。

１、土器

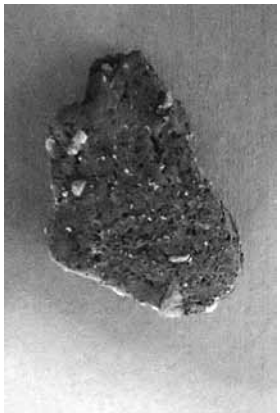


図１　土器

土器は胴部の小破片、北側の包含層の撹乱部から出土した土器である。土器の器形は不明。土器の表面がやや磨滅しているので詳細は明確でないが、上方に押点文とみられるくぼみがある。胎土には多量の石英、長石、金雲母のやや大きい砂粒が混入される。また、一部に滑石の粉末も混入されていて、内面の器面に滑石光沢を示す部分がある。色調は外面が赤褐色、内面が褐色をなす。共伴関係は撹乱層からの出土のため不明、よって、土器の時期比定は土器の特徴から決めざるを得ない。特徴は文様の押点文と滑石粉末の混入のみである。両者の特徴を兼ね備えるのは縄文時代中期後半から後期前半の阿高系土器であり、本資料もこの阿高系土器に比定して大過なかろう。なお、本遺跡出土の阿高系土器と胎土が類似していることも指摘できる。

２、炭化種子

炭化種子1　　検討のきっかけのになった炭化種子は土器破片の内側中央部に確認されたものである。一見、マメ類と見えるような炭化種子である。表面に露出している部分は長さ5.5mm、幅4.0mmの楕円形をしている。大きさはアズキ程度であるが、良く観察すると、種子はまだ胎土中にもぐり込んでいるので、一部が露出に過ぎない。元来はさらに大きい種子であることが推測できる。しかし、炭化種子は完形で胎土中に埋っているのではなく、果皮の状態になった大きな破片が埋まり込んだものであることが観察できる。炭化種子の果皮は比較的遺存状態が良好で、長軸に沿って細かい線が平行して観察できる。この果皮の組織はドングリ類の果皮の組織と極めて類似している。

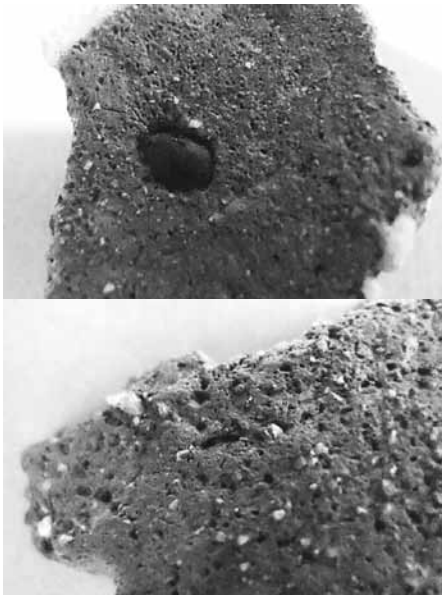


図２　上、炭化種子１　下、２

炭化種子2　　土器表面の押点文状のくぼみの直下に確認した。炭化種子は堅果類の果皮の炭化物で、表面にはその断面が顔を出しているのみである。長さ4.2mm、厚さ0.4mmである。幅は胎土に入り込んでいるため不明。断面は湾曲している。

炭化種子3　　炭化種子２の右側に５mm離れた土器の断面部に確認した。胎土中に存在した炭化種子の果皮破片が、土器が割れたことによって出現したものである。断面に露出し

図３、圧痕種子３

た炭化果皮は内面側が表面を向いていて、外面側は圧痕として残るのであろう。炭化種子の果皮破片は長さ5.5mm、幅3.0mmの不整楕円形で、厚さ0.4mmを測る。内面側は遺存状況が良好でないが、長軸に沿って条線が観察できる。

３、炭化種子の検討

３ヶ所で確認した炭化種子はいずれも堅果類の果皮が炭化したものである。これらの果皮はいずれも破片であり、種子の形を保つものはないが、これらの果皮は表面の組織構造や厚さ、復元される大きさ等から3点共に同じ種類の種子の果皮と考えられる。また、３点共に、胎土中に深く入り込んでいることから胎土に混入されたものであることは容易に推測できる。

炭化種子はみた限りでは堅果類の果皮であることはほぼ間違いないと考えられる。ではどのような堅果類（ドングリ類）が考えられるのであろうか。果皮はいずれも破片で、5.5mmを超えるものはないが、炭化種子１のマメ類に間違えるようなものもあり、他の炭化種子の湾曲の度合いからすれば、小型のドングリ類、例えばシイ等のドングリが考えられる。

調査区西半全景（南から）

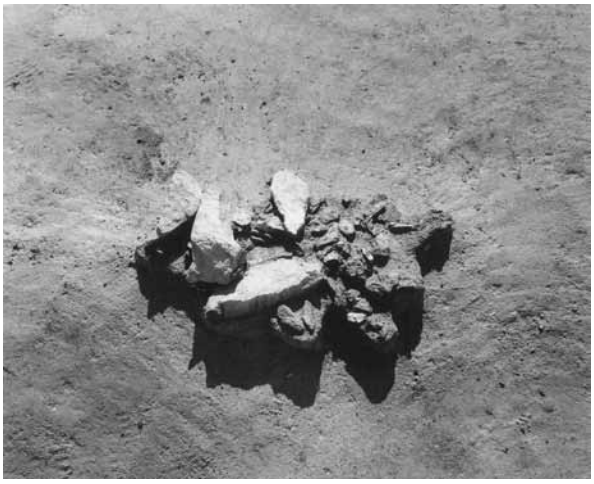
調査区東半全景（南東から）

竪穴住居 SC01（北から）

SC01（西から）

SC01 南東部土器群出土状況（北東から）

SC01 炉検出状況（南から）

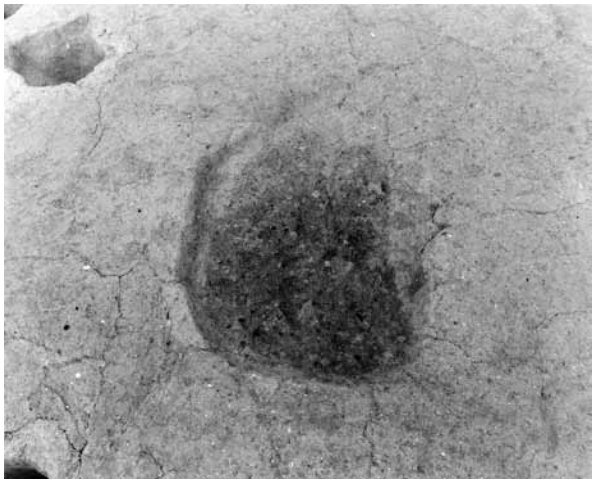


SC01 割石検出状況（北から）

竪穴住居 SC02（北西から）

土坑 SK03（南から）

土坑 SK05（東から）



鉄滓廃棄土坑 SK04（南から）

SK04 完掘状況（南から）

焼土坑 SK06（東から）

SK06 完掘状況（東から）

焼土坑 SK15（南から）

SK15 土層断面（西から）

土坑 SK23（南から）

SK23 土器出土状況（西から）

掘立柱建物 SB29（南から）

掘立柱建物 SB14（南から）

掘立柱建物 SB16（南から）

掘立柱建物 SB22（南から）

SX27（東から）

SX27（南から）

1

2

3

4

5

6

7

8

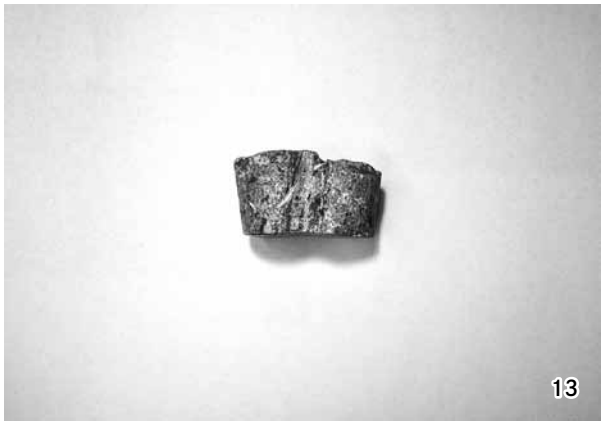
9

10

11

12

13


13

14

15

16

17

18

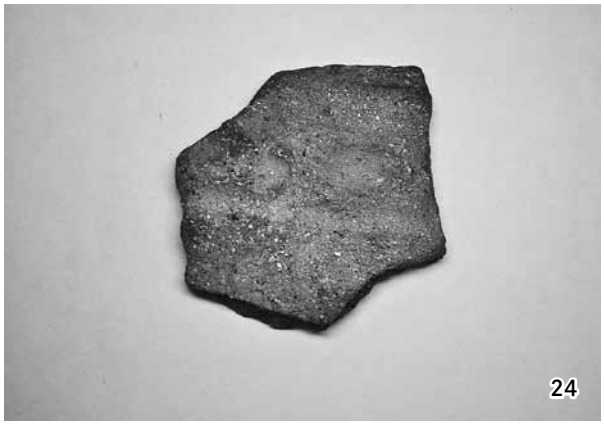
19

20

21

22

23


24

25

26

27

28

29

30

31

32

33

34

34

35

35

36

36

報 告 書 抄 録

ふりがな	とくながびーいせきに
書名	徳永Ｂ遺跡２
副書名	第２次調査報告
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第1228集
編著者名	木下博文
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡市中央区天神１－８－１
発行年月日	2014年3月24日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
とくながびーいせき 徳永Ｂ遺跡第２次	ふくおかしにしくおおあざとくなが 福岡市西区大字徳永 198、213	40130	02585	33°34′30″	130°15′29″	20071115 ～ 20080125	682.6	記録保存 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
徳永Ｂ遺跡	集落跡	縄文～中世	土坑、溝、竪穴住居、掘立柱建物、柱穴	縄文土器、土師器、須恵器、中国産磁器、石器、鉄滓	縄文時代中期の阿高式土器、古墳時代中期の竪穴住居を検出

要約	徳永Ｂ遺跡は福岡市西部、早良平野と糸島平野を分かつ高祖山より伸びる丘陵上に位置する集落遺跡である。今回の調査地点は今宿バイパスの北側、山ノ鼻２号墳の立地する丘陵の西側に当たる。縄文時代中期の阿高式土器片一括廃棄、古墳時代中期前半の竪穴住居、古代の焼土坑・鉄滓廃棄土坑、平安時代中期の土師器皿・椀一括廃棄土坑、中世の掘立柱建物、溝、柱穴多数を検出した。

徳永Ｂ遺跡２
－ 第２次調査報告 －
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1228集

2014（平成26）年３月24日

発行　福岡市教育委員会
〒810-8621　福岡市中央区天神１－８－１

印刷　協文社印刷株式会社
〒819-0001　福岡市西区小戸４丁目24番５号